



2015～16 年度
国際ロータリー会長
K. R. ラビンドラン

Weekly Report Niigata



2015～16 年度
新潟ロータリークラブ会長
竹石 松次



世界へのプレゼントになろう

2015～16 年度 国際ロータリーのテーマ

新潟 RC1 月第 4 例会 (2016.1.26) No.3119

(1) ロータリーソング「それでこそロータリー」斉唱

(2) 竹石 松次 会長挨拶

竹谷富士雄

明治四十年 (1907) ～昭和五十九年 (1984)

五泉市本町 (旧中蒲原郡五泉町) で、父・竹谷鼎、母・キノの長男として生まれる。家はもの心がついた時から「姉やさん」と呼ばれる若い女性が母親代わりを努めることになった。実母は、富士夫を産んだまま実家から帰ってこなかった。実の母の愛情を得られなかったものの、田園の生活に幼い少年の思い出を残した。

父も絵を描くのが好きだったほか、母の祖父も馬蔭と称して日本画を描くなど、絵に対する憧れを抱いていた。しかし、十歳の時、父・鼎が三十一歳の若さで亡くなり大きな支えを失うことになった。このことが切っ掛けで、少し離れた阿賀野市 (旧北蒲原郡横越村の地主、高橋家に預けられることになった。おじいさんと女性のおてつだいさんの三人で人力車で出発した。

「三人のシルエットを今でも思い出し、あの時から牧歌が私の中に宿ったと考える」

と語っている。

横越村尋常小学校では、五泉の町から転校してきた色白の子として、いじめの対象となったが、次第に腕白ぶりも発揮、相撲を取ったり、図画の時間では先生から褒められるほどであった。

大正九年、十三歳の時に、村上市の県立村上中学に入学、村上市本町の鳥居家に下宿することになった。鳥居家には、同級生で後にパリと一緒に絵の修業に行く鳥居敏文と寝食を共にすることとなった。

絵の好きなグループでの交流が続いたほか、指導者に、岸田劉生、吉川純幹先生がいたことから将来、画家となる決意をする。中学五年の時にフランスから帰国した同郷の矢部友衛が小型の黒いソフト帽に、短いマントを羽織った大男に遭った。

「雲間に消えた天使を見たような驚きだった」

先輩となる矢部友衛から、立体派、未来派、ダダイズムを知らされ、思想的にも幼かった少年を目覚めさせ、プロレタリア美術運動への道を模索するようになった。

五年間の中学生生活を終えた後、勉強のため外国行きを親族会議に諮ったものの反対され、上京だけを許され、勉学

に勤しむことを条件に法政大学経済学部に入学することになった。

三木清の哲学概論に魅せられ、哲学者谷川徹三教授の授業に潜り込んだほか、プロレタリア美術研究所に通い、変名で作品を出品した。六十号のトアルに、着物姿の農民を描いた作品であったが、ソビエト大使館から人が来て作品が購入された。五十円と当時一カ月の生活費が賄えた。

この絵は、昭和七年 (1932) モスクワの美術館を訪問した際に、偶然奥にあった絵の前で、館長が、「やがてレニングラード (現サンクトペテルブルグ) のエルミタージュ美術館の一室に飾られるのですが、まだ整理されておきませんので」と見せてくれた絵が、自身の絵であったと著書、「パリの陽だまりから」で記している。

法政大学を卒業した後、やはり絵画研究に熱心で東京外語大学を卒業した鳥居敏文と共に渡欧することになった。

渡欧に対しては、田畑を売り払って費用を捻出、この時は親戚も反対しなかった。

敦賀を出港、ウラジオストク経由で二週間、モスクワに到着、三等列車で欧州に向かう、ソビエト、ドイツ、オランダ、ベルギー、スペイン、イタリア、ギリシャと凡そ一年の長旅であった。

この間、パリでは、かつてモジリアニが住んでいたアトリエで生活、写実画家であったシャルル・ブランの研究所に入り、本格的な油絵技法で裸体を学んだ。このころ林武がパリに到着、やがて、林武のアトリエでフォービズム、立体派の勉強を行った。

パリには、結局、三回にわたって訪れており、年数で述べ十一年を暮した。この間、藤田嗣治、荻須高德、林武らと親交を深める。

「私は、フランス絵画から色、光を学ぼうとして豊富に」パステルを使って描いたにかかわらず、フランス人画家からまったく日本的だと言われて、背中をひと突き喰ったような意外な感じを受けた。

しかし、考えてみれば、個性的になればなるほど、私の絵が日本的になるのは当然のことで、むしろ西洋の中で日本的に見えることに誇りをもってよいはずである。ともあれ西洋と日本の間を振り子のように揺れ動くのは、

私たち西洋画と呼ばれる油絵を選んだ者の宿命である。

日本の伝統を振り返ってそこへ戻るのではなく、振子を大きく振って地球の裏側で日本を考える意義の大きさを、そしてその楽しさを私は知っている。」

と述べている。

昭和十三年、萩市出身の三好孝子と結婚、東京で生活、結婚二か月後には、藤田嗣治と一か月間沖縄に取材旅行を行う。藤田からは、

『君は形に特徴があるから、それで行け、おれは質で行くよ。』と言われ、真似することを食い止めようとされたが、知らず知らず先生の影響を受けた。しかし、ゴーギャンにひかれ始めたのもこのころである」

と述べている。

憧れのパリには、昭和三十六年、昭和四十二年、昭和四十四年、昭和四十九年、七十一歳の、昭和五十三年、と数多く訪問している。

昭和四十四年、孝子夫人を伴ってのパリ出発に際し、三回目目の渡欧目的を記者に語っている。

「いなかむらいの武者修行の気持ちです。私も、もう六十一歳です。新しい勉強というより、パリで自分の絵を見つめることで、今まで気づかなかった日本的なものをしっかりつかみ、育ててきたいと思います。」

昭和五十九年(1984)五月、東京の病院で七十七歳の生涯を終えた。

昭和五十四年には、新潟県美術博物館で、「今日的な具象一県人作家三人展《小野末・竹谷富士雄・富岡惣一郎》」が開催された。この時に著者も三人に取材している。

ダンディな竹谷富士雄、好々爺の小野末、飾らない富岡惣一郎の印象を受けた。

(3) 委員会報告

・柴田 史郎情報委員長

1月14日情報委員会主催により、「新入会員を囲んで」の懇談会がホテルオークラに於いて開催された。竹石年度前期6か月で新入会員は10名であり、内6名の出席を頂いた。他にクラブ奉仕A樋熊紀雄大委員長、宇尾野 隆会長エレクト、情報委員会から4名などが同席した。懇談を通じて新入会員がクラブになじんで頂く事に主旨があり、和やかな良いファイアサイドミーティングとなった。今後も情報委員会として、新入会員に対してのロータリークラブに関する情報の提供や、入会後のサポートなどを積極的に展開していきたい。なお、この会を開催する以前に新入会員にアンケート調査を行った(実質8名分集計)。一部を紹介すると、※ロータリーの理念や目的について理解が出来るか(7/8が出来る)、※ロータリークラブについて、入会時に推薦者から十分な説明を受けたか(7/8が十分受けた)という結果であった。この結果についての解釈については、検討が必要かと思われた。

(4) 各種ご寄付の発表

ロータリー財団寄付発表(織戸 潔委員長)

五十嵐幸雄君

米山奨学会寄付発表(小林 敬直委員長)

徳山 啓聖君

(5) ニコニコボックス紹介(堀 盛富委員)

・玉 知夫君 先週の新年家族会、皆様のご協力で終えることができました。ニコニコします。

・竹田 正弘君 お花が届いたらしく家内から「32年経ってようやく結婚記念日を覚えたみたいだね。」と可愛げのないメールが届きました。「人の好意は素直に受け取るもんだ」とガツンと言いたところでしたが、「お蔭様で」と返信しておきました。夫婦円満の秘訣は多くを語らないことかも知れません。お花ありがとうございます。

・長谷川 秀彦君 結婚祝いの御花有難うございました。第29回サラリーマン川柳、新潟支社入選作品決定しました。8倍の難関を突破しての30作品です。「伊塚紅白」の作品が小林悟さんの作品で2作品が入賞しました。厳選なる選考の結果です。小林さん、おめでとうございました。

・五十嵐幸雄君 新年例会は来客のため失礼しましたが、当日、シニア会員激励のお菓子を届けて頂きました。客と一緒に酒の友として楽しみました。ありがとうございました。

・高橋 康隆君 新年会で古稀の御祝を頂きましたので。ただ体のいろいろなところで不具合が出てきて情け無い限りです。

・田村貫次郎君 新年会に私まで長寿祝のお菓子をいただき、恐縮に存じます。

・大澤 強君 新年家族会で、次男 祥大の成人の御祝を頂きました。次男は札幌で元気にやっています。ありがとうございました。

・田中 克典君 先週の新年家族会で思いも寄らない、還暦と年男の御祝を頂きニコニコでした。皆様に感謝申し上げます。

(6) 幹事報告(吉田 和弘幹事)

・新潟いのちの電話公開講座のお知らせ
姜尚中氏 講演会
2月19日(金)18:30開演
メディアシップ2F 日報ホール

(7) 卓話「地域デビュー ～好きなまちに、

あなたの「手」を加えてステキなまちへ～」

認定NPO法人 新潟NPO協会理事・事務局長 井上基之氏

(8) 1月26日例会の出席率 71.13%

会員数99名(出席免除会員 9名)

出席者69名(出席免除会員7名を含む)

(2週間前メーク後 76.84%)

2月9日の例会予定

会員スピーチ「植草甚一的な新潟の過ごし方」

セコム上信越(株)代表取締役社長 竹田 正弘君